

「出遇いと別れ」

私が彼と出遇ったのは18年前の7月です。母が亡くなって、まだ49日法要も済まない時でした。彼と言っても近所の友達の家の下で生まれた、丁度乳離れして、我が家にやって来た猫のことです。

別に猫が欲しいと言ったわけではありませんが、何故、猫が来たのか、それは猫が大嫌いな母が亡くなったからです。

「これで、やっと1匹もらってくれる人が見つかった」という友達の嬉しそうな言葉とともに、砂箱と離乳食も一緒に来たのですが、一つ困ったことがありました。

それは、彼が人間嫌いだったのです。人間の手から逃れると、彼は食器棚の裏に入り込んで、母猫を探して声の出る限り泣き叫びました。抱っこしてやろうと手を伸ばすと強烈な猫パンチがかえってきました。

よく考えれば彼の行動は当たり前です。甘えていた母猫から無理やり引き離されて、全く知らない人間のもとに連れてこられたのですから。

それから1カ月程は、用意された餌は食べ、砂箱は使っているのですが、姿は見せたことがないという不思議な関係が続きました。

その間に彼は人間との付き合い方を彼なりに決めたようでした。1カ月振りに姿を見せた彼は、実に堂々としていました。「ポン」と名付けられた彼はこの家での自分の座を決めてから17年間生きて、その生涯を終わりました。

死んでいた所は、玄関にある彼が一番好きなお昼寝の場所でした。

彼は1匹の猫でしたが、私に生老病死を身をもって、しっかりと教えてから旅立っていったナァと思われてなりません。